

ジャイナ教における虚偽の概念をめぐって

河 崎 豊

0. はじめに
1. Das 諸註釈における二つの解釈をめぐって
2. TAS 諸註釈における理解をめぐって
3. おわりに — Siddhasena の『俱舎論』批判

0. はじめに

かつて筆者は、空衣派ジャイナ教の聖典のひとつである Śivārya (1-2世紀) 作 *Bhagavatī Ārāḍhanā* が記述する真実語の誓戒 (vrata) を中心にして、そこに見られる「正しくないことば (asamtavayana)」を分析した¹。そこで筆者は、sat あるいは satya という概念が拡大され、倫理的・道義的な適切さ・正しさ — 一人を傷つける言葉は、それがたとえ事実の指摘であっても「虚言」とみなす、といった — という観点から、真・偽の概念が再編成されていた事実を指摘した。また真・偽の解釈に対するこのような措置は Śivārya 特有のものではなく、彼以降の人物にもある程度共有されていたことも簡単に指摘した。

本稿は、前の拙稿で取り上げなかった文献、特に白衣派の文献を用いて、真実語の誓戒における真実あるいは虚偽の概念について更なる検討を加えることで、前の拙稿に対し若干の補足を行なうことを目的とする。まず、白衣派ジャイナ教聖典中、いわゆる seniors に位置し、真実語の誓戒についての記述がある *Dasaveyāliya* (以下 Das) に対し Agastyaśiṃha が著した *Cūrṇi* (DasCA) と、恐らく Haribhadra 註 (DasH) に先行するが著者不明のプラークリット・サンスクリット混交体散文註 (DasCJ²) とにおける、真実語の誓戒の解釈を確認する。次に、白衣派・空衣派の双方が権威を認める、代表的な綱要書である *Tattvārtha [-adhigama-] sūtra* (以下 TAS) に対する白衣派側の註釈である自註 (とされるもの、以下 TASU) と、それを大幅に敷衍した Siddhasena

1 河崎豊「*Bhagavatī Ārāḍhanā*における「真実」と「虚偽」」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』24号、2013年、pp.29-43。

註（以下 TASS）を中心とし³、空衣派側の註釈として Pūjyapāda 作 *Sarvārthasiddhi*（以下 SAS）と、それを敷衍した Akalaṅka 作 *Rājavārtika*（以下 RV）とを取り上げ、真実語の誓戒に対する解釈の特質を検討する。

1. Das 諸註釈における二つの解釈をめぐって

白衣派聖典 seniors のひとつである Das は、第 4 章で不殺生から始まる出家者の誓戒について議論する。真実語の誓戒はその二番目に位置し、以下のように説かれる：

次にまた別の、幸いなる方よ、第二の大誓戒として、虚言から離れることがある。幸いなる方よ、全ての虚言を私は放棄する — 当の〔虚言〕が怒りからであれ、あるいは貪りからであれ、あるいは恐怖からであれ、あるいは笑いからであれ、自ら虚ろなことを言い放つべきでは決してない。他人たちをして虚ろなことを言い放たせるべきでは決してない。他者たちが虚ろなことを現に言い放っていても、容認するべきではない。命ある限り〔以上の〕三種を三種によって〔つまり〕思考・言語・身体によって私はなさず、なさせず、他人が現になしているのをも容認しない...⁴

ここでは、虚言を発する原因が怒り・貪り・恐れ・笑いの四つとされるが、そのような精神状況において実際にどのように発言すれば *musāvāya* であり得るのか⁵は、当該の記述からでは明らかとならない。それに対し、DasCA と DasCJ は、具体的に何を虚言とするかについて議論を行なう。まず DasCA は、虚言を三種類に分類する。即ち、

2 Cūrṇi と名付け、かつ Jinadāsa によって著されたとする校訂者を尊重して — またこれまでの拙稿でも同様の略号を用いているので — DasCJ という略号を用いたが、本来この註釈の名は *Vṛddhavarāṇa* であり、かつ著者は不明であることについては、Klaus Bruhn, “Ludwig Alsdorf’s *Studies in the Āryā*,” *Berliner Indologische Studien* 9/10, 1996, pp.7-53, esp., p.46 及びそこで挙げられる諸研究を参照されたい。この註釈の年代については、少なくとも DasH は DasCJ を知っており、後者から引用を行なっていることが指摘されている（DasCA の *prastāvanā* p. 2 を見よ）ので、8 世紀よりは前のものと考えられる。

3 TAS にはこの他にも Haribhadra と Yaśobhadra の手になる註釈が存在するが、後者が著した 7 章に限って言うと、原文自体がほぼ一致するため、本稿では取り上げない。

4 *ahāvare docce bhante mahavvāe musāvāyāo veramaṇaṃ / savvaṃ bhante musāvāyaṃ paccakkhāmi, se kohā vā lohā vā bhayā vā hāsā vā / neva sayaṃ musaṃ vaejjā, nevannehiṃ musaṃ vāyāvejjā, musaṃ vayante vi anne na samaṇujānejjā, jāvajjivāe tivihāṃ tivihēṇaṃ maṇeṇaṃ vāyāe kēṇaṃ na karemi na kāravemi karentaṃ pi annaṃ na samaṇujāṇāmi...*

5 尤も、Walther Schubring, *Die Lehre der Jainas*, Berlin & Leipzig, 1935, p.104 が言うように、*Gemütsbewegung* から発せられた発言はそのまま *mosa* と理解されていた可能性はあるかもしれない。

虚言は三種類からなる。それは〔つまり〕(1)真にあることの否定(2)現に存在しないことの表明(3)異なる対象⁶。

DasCAによると、(1)は「ジーヴァは存在しない」と言うことなど、(2)は「〔ジーヴァは〕存在する。ただし、遍在している」と言うこと、(3)は牝の牛を牝の水牛であると言うようなことである⁷。これらはいずれも、ある発言が実際に真か偽かを問うものであり、前述したような道義的・倫理的な正しさや適切さといった視点は存在しない。要するに、この記述を見る限り、真・偽を道義的側面から解釈しようという意図はDasCAにはないと考えられる。一方DasCJ (148.2-3)は、虚言を以下のように分類する：

虚言は四種類からなる。それは〔つまり〕(1)真にあることの否定(2)現に存在しないことの表明(3)異なる対象(4)非難⁸。

DasCJは新たに第四の区分として非難 (garahā) を加え⁹、それは具体的には、「非難というのは、『全く同様に、隻眼の者を隻眼だと〔言うべきではない』』といったことなど¹⁰」だという¹¹。ここで彼が言う「隻眼の者」云々は、清浄な言葉について議論を行なうDas 7章の第12詩節からの引用である。直前の第11詩節と共に示せば以下の通り：

全く同様に、長上を傷つける荒い会話は、それが事実のものでも言うべきではない。悪〔業〕の到来があるから。全く同様に、隻眼の者を隻眼だと、あるいは去勢者を去勢者だと、あるいは病人を病気の者だと、あるいは泥棒を盗人だと言うべきではない¹²。

以上からすると、DasCJが考えている非難とは「いわれなき非難」ではなく、「ある事実の指摘が、それを言われた他者を傷つけること」、つまりアヒンサーの精神に反す

6 musāvāto tivīho, taṃ --- sabbhāvapaḍiseho abhūtubbhāvaṇaṃ atthaṃtaraṃ.

7 sabbhāvapaḍiseho jahā natthi jīve evamādi. abhūtubbhāvaṇaṃ atthi, savvagato puṇa. atthaṃtaraṃ gāviṃ mahisiṃ bhaṇati evamādi.

8 ... musāvāo cauvviho, taṃ --- sabbhāvapaḍiseho asabbhūyubbhāvaṇaṃ atthaṃtaraṃ garahā.

9 DasH (p.98) も全く同様に、虚言を四区分する：mṛṣāvādaś caturvidhaḥ, tadyathā --- sadbhāvapratiṣedhaḥ asadbhāvodbhāvaṇaṃ arthāntaraṃ garhā ca, tatra sadbhāvapratiṣedho yathā --- nāsty ātmā nāsti puṇyaṃ pāpaṃ cetyādi, asadbhāvodbhāvaṇaṃ yathā asty ātmā sarvagataḥ śyāmākatandulamātro vetyādi, arthāntaraṃ gām aśvam abhidadhata ityādi, garhā kāṇaṃ kāṇaṃ abhidadhata ityādiḥ.

10 DasCJ (148.5) : garahā nāma 'taheva kāṇaṃ kāṇi' tti evamādi.

11 (1)~(3)の解釈はDasCAと大同小異である。DasCJ (148.3-5) : tattha sabbhāvapaḍiseho nāma jahā natthi jīvo natthi puṇṇaṃ natthi pāvaṃ natthi baṃdho natthi makkho evamādi, asabbhūyubbhāvaṇaṃ nāma jahā atthi jīvo (savvavāvī) sāmāgataṃdulametto vā evamādi, payatthaṃtaraṃ nāma jo gāviṃ bhaṇai eso āso tti.

る発言を非難と呼び、それを虚言の範疇に含めていることになる。言語活動を制限するものとして、例えばほかにも出家者には「会話の用心 (bhāṣasamiti)」や真実語の警戒を強化する実修 (bhāvanā) があり、そこにこの種の発言を含めることもできた筈であるから、敢えてした措置とも言えよう。またこのようなDasCJの解釈に基づく限り、mṛṣāvāda を単純に「嘘をつく」と訳すと、DasCJ の意図と乖離しかねない。

Das 自身はこの種の言明を虚言と見るわけではなく、あくまで「事実」と捉えていることに注意すべきである。Das 7.2¹³は「述べられるべきではない事実の〔言葉〕、虚実入り混じった〔言葉〕、虚ろな〔言葉〕、覚者たちによって実践されていない〔言葉〕—そういうものを洞察力ある者は語るべからず¹⁴」とするが、語るべきではない事実を虚言と見ているわけではないことは、虚言を別に立てていることから明らかである。また、発話内容を(1)事実であるもの(2)虚ろなもの(3)虚実入り混じったもの(4)事実でも虚ろでもないものに分け、それらが「罪を伴い、行動を伴い、雑で、辛辣で、耳障りで、荒く、業の到来を招き、切断や分断や苦痛や殺害をもたらし、生類をぶち殺すもの」ならば語るべからずとする Āy II 4,1,6 (§ 528)¹⁵も、同様である。

この後、DasCAとDasCJ、またDasHも、実体 (dravya)・土地 (kṣetra)・時間 (kāla)・状態 (bhāva) という四つのニクシェーパ¹⁶に基づいて虚言を分類した後、特に実体と状態の点で虚言が成立する条件を提示する¹⁷。それらを整理すると以下の通り：

1. 実体の点では虚言だが状態の点ではそうではないもの (*動物などが隠れているのを見て、それが殺されることを恐れ、それを見たのに「見ていない」という)
2. 状態の点では虚言だが実体の点ではそうではないもの (*虚言を言おうと決意し

12 taheva pharusā bhāsā gurubhūovaghāṇī /

saccā vi sā na vattavvā jao pāvassa āgamo //11//

taheva kāṇaṃ kāṇe tti paṃḍagaṃ paṃḍage tti vā /

vāhiyaṃ vā vi rogi tti teṇaṃ core tti no vae //12//

なお、同様の規定はĀy II 4,2,1 (§ 533)にも存在する。そこでは、腫物がある者 (gaṃḍī) や手に欠損がある者 (hatthachinna) などは、「お前には腫物がある」「お前は手が切られている」という類の言葉をかけられるたびに激高する (eyappagārāhiṃ bhāsāhiṃ buiyā 2 kuppamti) がゆえに言うべきではない、という。

13 この詩節は TASS (p.74) が教証として引用する。

14 jā ya saccā avattavvā saccāmosā ya jā musā / jā ya buddhehi 'ñāṇṇā na taṃ bhāsejja pannavaṃ //

15 se bhikkhū vā 2 jā ya bhāsā saccā jā ya bhāsā mosā jā ya bhāsā saccāmosā jā ya bhāsā asaccāmosā tahappagāraṃ bhāsaṃ sāvajjaṃ sakiriyaṃ kakkasaṃ kaḍuyaṃ ṇiṭṭhuraṃ pharusam aṇhayakarim cheyaṇakarim bheyaṇakarim paritāvakarim uddavakarim bhūtovaghāṇiyaṃ abhikkhaṃ ṇo bhāsejja.

16 ニクシェーパについては、藤永伸「ニクシェーパ」『ジャイナ教研究』12号、2006年、pp. 1-16を見よ。また、虚言をニクシェーパの視点で分類することの意義については、前掲拙稿(註1)、p.31を見よ。

ているが、誤って事実を述べてしまう)

3. 実体・状態双方の点で虚言であるもの (*虚言を言おうとして虚言を言う)
4. 空疎、つまり実体・状態の双方で虚言が成立しない

嘘をつこうという意図がある時点で、状態の点での虚言に加担したと見做すことは、虚言を発したか否かの判断基準を話す主体の精神状態に置く点で、後に触れる TASS の「不注意な者」という解釈に通じ、注目される。一方で、少なくとも DasCJ や DasH に限って言えば、彼らが有害なことを虚言として扱う以上、生命保護のために敢えてつく嘘、つまり 1 番を、どこまで罪深いと考えていたのか疑問である¹⁸。また既に明らかにされているように¹⁹、ジャイナ教徒が殺生か否かを判断するにあたり、心理的に殺生をしようと思っている状態こそが殺生であると定義づけていくところからすると、2 番の虚言が 1 番のそれよりも、より罪深いと理解されていた可能性は高い。

真実語の誓戒に DasCJ や DasH が行なう以上の如き処理は、代表的綱要書である TAS への諸註釈でも見受けられる。以下、それを確認する。

2. TAS 諸註釈における理解をめぐる

TAS は第 7 章において出家と在家の誓戒を集中的に取り扱う。TAS 自体は極めて簡潔なストラ体で記されているため、著者がどのような意図でそれらのストラを著

17 DasCA : saṃbhavo se māraṇabhaeṇaṃ likkaṃ diṭṭhaṃ avi adiṭṭhaṃ bhaṇati esa davvato ṇa bhāvato musāvāto 1. musāvātavavasitassa khaliṇa sabbhāvavayaṇaṃ āgataṃ esa bhāvato ṇa davvato 2. musāvātapaṇiṇato musaṃ vadati esa davvato bhāvato ya 3. cauttho suṇṇo 4. ; DasCJ (148.12-149.1) : tattha davvao musāvāo ṇo bhāvao, jahā koī bhaṇijjā --- atthi te keī pasumiḡāṇo diṭṭhā? tāhe bhaṇai ṇatthi, esa davvao musāvāo ṇo bhāvao, bhāvao no davvao jahā musaṃ bhaṇihāmi tti, tao tassa vaṃjaṇāṇi sahasa tti saccamāṇi viṇiggayāṇi tāṇi, esa bhāvao no davvao, davvao vi bhāvao vi jahā musāvādapaṇiṇao koyi tam eva musāvādaṃ vadijja, cauttho bhaṃgo suṇṇe. ; DasH (p.98) : tattha koi kahiṃci hiṃsujjao bhaṇai --- io tae pasumiṇā (gā) iṇo diṭṭha tti? so dayāe diṭṭhāvi bhaṇai --- ṇa diṭṭha tti, esa davvao musāvāo no bhāvao, avaro musaṃ bhaṇihāmi tti aparīṇao sahasā saccam bhaṇai esa bhāvao no davvao, avaro musaṃ bhaṇihāmi tti aparīṇao musaṃ ceva bhaṇai, esa davvao vi bhāvao vi, caramabhaṃgo puṇa suṇṇo.

18 Āy II 4,1,7 (§ 529) は、話しても構わない会話のひとつとして「事実にして微細なる会話 (jā ya bhāsā saccā suhumā)」を挙げる。ĀyŚ (388a 8-9) によると、「微細」とは「クシャ草の先端の如き知性でもって考慮される〔会話〕なら、虚ろであっても事実のものとなる (kuśāgrīyayā buddhyā paryālocyamānā mṛṣāpi satyā bhavati)」ことを意図しているとし、例として獣を見つけた時でも獵師などに「獣はいない」と嘘をつくこと (saty api mṛgadarśane lubdhakāder apalāpa) を挙げる。つまり他人に殺生をさせないための虚言は真実である、とする。ĀyC (362.1-2) は、端的に「生命体への憐れみに向かった〔言葉は〕微細である (jīvadayaṃ prati suhumā)」と説明している。

19 宇野智行「不殺生と不注意 (pramāda)」『印度学仏教学研究』62巻1号、2013年、pp.299-293を見よ。

したのかを知ることは概して困難である。自註とされる TASU もおおむね簡潔である上、そもそも著者問題が未決である。一方、TAS はそのような簡潔な文体であるがゆえに、白衣派も空衣派も、非常に詳しい註釈を作成した。そのうち、白衣派における最も浩瀚なものが、Siddhasena の註釈 (TASS) である。一方、空衣派では SAS と RV とが以降の空衣派における TAS 解釈の基礎となっている。以下では、これら TAS 諸註釈における真実語の誓戒の解釈を、TASS を中心として検討する。

最初に注意すべきは、TAS 諸註釈では不殺生の誓戒が他の諸誓戒より重要だ、という考えへの傾斜が顕著なことである²⁰。端的な例は SAS で、TAS 7.1 が「殺生・虚偽・偷盜・淫蕩・所有から離れることが誓戒である²¹」と、不殺生の誓戒を筆頭に置く理由を、SAS は不殺生の誓戒が主要であるからだとし、真実語などの他の誓戒は不殺生を保護するために存在するのであって、トウキビに囲いをするようなものだという²²。また第5スートラ²³は、五大誓戒の遵守を強化せしめる実修方法として、殺生などが「あるいは、苦に他ならない〔と実修せよ〕²⁴」とする。これは、暴力などが自分に加えられれば苦が生じるように、全ての生類も同じようにされると苦が生じる、と観想するものである。つまり、諸誓戒を守る理由のひとつを、他者への苦を作ることに求めているわけである。当面の問題に限れば、虚言に関して TASU は「過去に、誤った言いがかりをつけられた私に激しい苦が生じたのと同じように、全ての生類にも〔激しい苦が生じる〕²⁵」と観ずることを提示する。このように、不殺生の誓戒以外の諸誓戒を不殺生と関連づけること、あるいは広く他者への苦痛と関連せしめることは、TASS も踏襲する。

さて、真実語の誓戒における虚偽の概念を定義する TAS 7.9 は、*asadabhidhānam anṛtam* (*asat* の表明が、虚偽である) というものである。*asat* は、素直に訳せば「実在しないこと」であろうが、この問題については後ほど触れる。

このスートラに対し、まず TASS は TAS 7.8 にある *pramattayogād* 「不注意な者の行動ゆえに」という語が継起する (*anuvartate*) として、「身・語・意の行動について不注意な者が *asat* の表明と結びつくとすれば、それが虚偽である²⁶」の意味だとする。要

20 なお堀田和義「生き物を殺さないための性的禁欲—ジャイナ教在家信者の行動規範を中心に—」『印度学仏教学研究』63巻2号、2015年、pp.872-867、esp., pp.872-871を参照せよ。

21 *hiṃsānṛtasteyābrahmaparigrahebhyo viratir vratam*.

22 SAS § 664 : *tatra ahiṃsāvratam ādau kriyate pradhānatvāt. satyādīni hi tatparipālanārthāni sasyasya vṛttiparikṣepavat.*

23 これは白衣派のスートラ番号であり、空衣派では第10スートラになる。

24 *duḥkham eva vā.*

25 TASU (p.53) : *yathā mama mithyābhyākhyānenābhyākhyātasya tīvraṃ duḥkhaṃ bhūtapūrvaṃ bhavati ca tathā sarvasattvānām.*

26 TASS (p.72) : *pramatto yaḥ kāyavānmanoyogair asadabhidhānam prayunkte yat tad anṛtam.*

するに、不殺生の誓戒の場合と同様²⁷、虚言を表明する主体を、精神的に注意力を欠く者に限定する。また、単に言語を用いるだけではなく、「不注意にして行為に没入している行為主体たるアートマンによって、意図した目的を達するのに最も効果的なこと〔がなされる〕」というので、身体を用いて〔つまり〕手や目や唇や足をはじめとする〔身体の〕パーツを用いた不快な行為によって他人を騙し、言葉によっても sat ではないことを言い、思考によっても『こうやって他人は越えられるべきである』と観察する²⁸』と言う。

次に TASS (p.72) は、「mithyānṛtam とスートラを作ることが合理的である。短いから²⁹』という反論を挙げる。つまり、この誓戒では嘘を吐くことを禁じればいいのであるから、より端的に「逆に〔ものごとを表明することが〕虚偽である」とするほうがスートラを作成する作法に適う、と言うものである。しかし、TASS はこの反論を以下のように退ける：

それはそうではない。カウシカをはじめとする者の発言の如く、顕われとしては事実である〔が、〕他者への圧迫をなし、悪〔業〕の取得の原因となる言葉を禁じるために、asadabhidhāna と表現される³⁰。

この一文は、TASS が「虚偽」を事象の単なる真・偽の問題とは捉えていないことを明示している。もし TASS が真・偽の問題と捉えているならば、他者を圧迫するか否かという、真・偽とは本来無関係な筈の視点は現れようがなく、そのような問題を虚言の範疇に含めようとすれば、基本的には「逆」「反対」を意味する mithyā という表現をスートラに用いることは不可能であろう。かかる視点の実例が、「カウシカをはじめとする者の発言」である。このカウシカ某について、今のところ筆者は TASS 以前の資料にソースを見出すことができず、彼がいかなる資料に依りこの例を出したのか定かでない。但し、カウシカ某の逸話自体は Siddhasena 以降の資料に少なくとも一例存在する。それは Hemacandra 作 *Yogaśāstra* 1.61 及び自註 (YSSV) に見出され、そこではまさしく他者への危害を加える真実を述べてはならない、という文脈で現れる。すなわち 1.61 は「事実であっても、他者への圧迫をなす言葉を語るべきではない。世間

27 宇野智行「不殺生…」(←註19)を見よ。また、ジャイナ教における pramatta / pramāda の分類については、宇野智行「飲酒の弊害：Aṣṭakaparakaraṇa 第19章翻訳研究」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社、2014年、pp.411-424、esp., pp.412-415を見よ。

28 pramattasyābhiniviṣṭacetasa ātmanah kartur vivakṣitārthapratipādane sādhatatamam iti kāyena hastalocana-
auṣṭhapādādyavayavakriyābhir alikābhiḥ paraṃ vañcayati, vācāpy asad bravīti, manasāpy ālocayati evaṃ
paraḥ pratāraṇīya iti.

29 mithyānṛtam iti sūtravinyāso yukto laghutvād iti cet.

30 tan na. satyābhāsasya parapīḍākāriṇo vacasaḥ pāpādānāhetukasya pratiṣedhāya kauśikādivākyasya^{iva}^as-
adabhidhānagrahaṇam.

でも、カウシカは地獄に逝ったと聞かれているから³¹』というものであり、その逸話は YSSV によると以下の通り：

カウシカ某という、真実を財とする苦行者がいた。村での共住を放棄した後、当の者はガンジス河沿いで寝泊りしていた(1)。球根や根を摂り、所有意識を離れ、所有を離れている者として、真実を公言するということにより、最高の成就にあの者は達した(2)。別の日、ならず者たちは村を強奪した後、当の〔カウシカ〕が見ているというのに、庵の傍で蛇たちが穴に〔赴く〕ように、森に赴いた(3)。一方、彼ら〔ならず者たち〕を探す村人たちは、当の〔カウシカ〕の方に赴いて尋ねた：「君は真実を公言する者である。それゆえ言いなさい、泥棒たちがどこへ赴いたのかを」(4)。次に、諸々のダルマの真義を理解するカウシカは語った：「この深い叢林の中にならず者たちは入って行きました」と(5)。彼の教示のせいで、武装の末に剣を手にした村人たちは、森に入って、猟師たちが獣たちを〔殺戮する〕ように、ならず者たちを殺戮した(6)。真実であっても虚偽であるこの言葉を発しつつ、他者の危機を作ることにより、己の寿命が尽きた後に苛烈な地獄へと苦行者カウシカは逝った(7)³²。

カウシカは、盗賊たちの居場所を正直に教え、村人たちの殺生を引き起こしたがゆえに地獄に墮ちるような悪業を結んだ。彼の発言は仮令事実でも虚言と見做される所以である。YSSVがTASSに先行するとは考え難いが、明らかに同じ文脈で登場する以上、TASSもYSSVが引く逸話と同様の内容のものが念頭にあったと考えることは妥当だろう。

以上のように、TASSはmithyānṛtamとストトラを表現することの欠点を指摘するが、ではなぜasadabhidhānamと表現すれば、他者への圧迫を行なうか否かというような視点を含み得るのか。ここでTASSは、当該ストトラにおけるsatは「実在すること」あるいは「真実のこと」を意味するのではない、と主張する (p.72)：

sat という語が「称賛」の意味を持つことは、satpuruṣa や sajjana をはじめとする諸々の用法において、世間で周知のことである。satではないというのがasatであ

31 na satyam api bhāṣeta parapīḍākaraṃ vacaḥ / loke 'pi śrūyate yasmāt kauśiko narakam gataḥ //

32 āsīt satyadhanaḥ ko 'pi kauśiko nāma tāpasaḥ / apāsya grāmasaṃvāsam anugaṅgam uvāsa saḥ //1//
kandamūlaphalāhāro nirmamo niṣparigrahaḥ / satyavāditayā prāpa prasiddhiṃ paramām asau //2//
muṣitvā grāmam anyedyur dasyavas tasya paśyataḥ / āśramaṃ nikaṣā jagmur vanaṃ bilam ivoragāḥ //3//
teṣām anupadinas tu grāmyāḥ papracchur etya tam / satyavādy asi tad brūhi taskarāḥ kutra vavrajūḥ //4//
dharmatattvān abhijño 'tha kathayāmāsa kauśikaḥ / ghane tarunikuñje 'smin dasyavaḥ prāviśann iti //5//
tasyopadeśāt sannahya grāmīṅāḥ śastrapāṇayaḥ / vanaṃ praviśya nirjaghnur dasyūn vyādhā mṛgān iva //6//
ṛtam apy anṛtam paravyathākaraṇenedam udīrayan vacaḥ / paripūrya nijāyur ulbaṇam narakam
kauśikatāpaso yayau //7//

り、称賛されていないもの、〔つまり〕解脱者（＝ティールタンカラ）によって導かれた聖典で非難されているか、あるいは禁じられているものである³³。

このように TASS は、当該スートラにおける sat を称賛の意味³⁴とし、その称賛とはティールタンカラが導いた聖典が称賛しているか否か、という問題だと理解する。かく sat の意味を処理することで、TASS は当該スートラにおける虚偽を単なる発言の真・偽という問題に縛ることから解放し、不注意な者が行なう聖典において非難あるいは禁止されている言語活動の全てを、虚偽の範疇に落とし込むことに成功する。

当該スートラにおける sat をかく解釈することは、TASS のみのものではない。恐らく TASS に先行する SAS (§ 689) は、「sat という語は称賛をいうものである。sat ではないものが asat であり、称賛されていないという趣旨である³⁵」とし、更に「一方、「称賛されていない」とは何か。生命体への苦痛を作ること、それは称賛されていないものであり、現存することを領域とするものでも、あるいは現存しないことを領域とするものでもある。そして、まさに前もって「不殺生の誓戒を保護するために他の誓戒がある」と述べられている（← § 664）。それゆえ、殺生を作ることばが虚言である、と決定されるべし³⁶」と、殺生をもたらす言葉こそ虚言だと限定するに至っている³⁷。また、TASS と恐らく同時代の RV は、TASS と同様スートラを mithyānṛtam と表現すべきだという説に対し、mithyā と表現すると「逆 (viparīta)」という意味だけに同意することになるが、そうすると「現にあることの否定 (bhūtanihnava)」と「現にないことの表明 (abhūtodbhāva)」だけが虚偽になるため、「他の生類を圧迫すること (paraprāṇipīḍākaraṇa)」が含まれない。しかし asat と述べれば、「称賛されていない」という意味のことは何でも全て虚偽と言われる（趣意）³⁸、と反論する。

33 sacchabdaḥ praśamsārtho loke pratītaḥ satpuruṣaḥ sajjana ityādiṣu prayogeṣu. na sad asat apraśastam āptapraṇītāgamaninditaṃ niṣiddhaṃ vā.

34 sat がかかる意味を持つことは、諸種の辞典を見れば明らかな通り、特殊な話ではない。伝統的な定義的用例の一つのみ挙げれば、AmK 3.3.83ab : satye sādhu vidyamāne praśaste 'bhyarhite ca sat.

35 sacchandaḥ praśamsāvācī, na sad asat apraśastam iti yāvat. 底本は na を欠くが、RV より訂正する。

36 kiṃ punar apraśastam? prāṇipīḍākaraṇaṃ yat tad apraśastam vidyamānārthaviṣayaṃ vā avidyamānārthaviṣayaṃ vā. uktaṃ ca prāḡ evāhiṃsāvrataparipālanārtham itarad vratam iti. tasmād dhīmsākaraṃ vaco 'nṛtam iti niśceyam.

37 同様に、例えば VBh 45 に対する VBhM (p.32) も「mr̥ṣāvāda とは生類をぶち殺す言葉である (mr̥ṣāvādaḥ bhūtopaghātivacaḥ)」とのみ定義付ける。

38 RV (p.542) : syān matam --- mithyānṛtam ity etat sūtram astu. kutaḥ? laghutvāt. sūtraṃ hi nāma yal laghu gamakaṃ ca tat kartavyam iti ; tan na ; kiṃ kāraṇam? viparītārthamātrasampratyayaprasaṅgāt. ayaṃ hi mithyāśabdaḥ viparītārthe vartate. tena bhūtanihnave abhūtodbhāve ca yad abhidhānaṃ tad evānṛtam syāt --- nāsti ātmā nāsti paraloka iti, śyāmākataṇḍulamātram ātmā aṅguṣṭhparvamātraḥ sarvagato niṣkrayaḥ iti ca, yat tu vidyamānārthaviṣayaṃ paraprāṇipīḍākaraṇam tan na syāt. asat iti punar ucyamāne apraśastārtham yat tat sarvam anṛtam uktaṃ bhavati. tena viparītārthasya prāṇipīḍākaraṇasya cānṛtatvam upapannaṃ bhavati.

TASS は以上のように sat の意味を定義した上で、TASU (p.73) が提示する sat の四分類 — DasCJ や DasH が提示するものと基本的には同一の、「asat とは、(1)真にあること³⁹の否定(2)異なる対象(3)非難、である。そのうち、(1)真にあることの否定とは、(1-1) 現にあることの否定(1-2) 現にないことの表明⁴⁰、である」を説明する。紙幅の都合(1)(2)は措き⁴¹、本稿の問題と直接関係する(3)のみ確認すると、TASU (p.74) は、(3)を「殺生や荒さや中傷などと結合した言葉であり、事実でも非難されているに他ならない⁴²」とする。これに対し TASS (p.74) は、sat に対する解釈と同様、「非難」を「教典で禁止された言語的活動は非難される〔つまり〕叱責されるという趣旨⁴³」とし、非難の基準をジャイナ教典に定める。その上で、例えば殺生と結びついた言葉は「事実であっても聖典では叱責されているから虚偽に他ならない⁴⁴」。更に、殺生停止にとって虚言停止などは補助の働きをするもの (parikara) だと言い切り、その理由を「殺生の停止を完全に保護するためだけに虚言の停止などが教示されているから⁴⁵」として、先述したようなアヒンサー至上主義を明示する。

そして TASS は、TASU の(3)における「など」という語には、「策略の (chala)」「欺く (śaṭha)」「騙す (dambha)」「穢れた (kalka)」「変化する (vikāra)」「甘言の (ullaptikā)」「辛辣な (kaṭuka)」「疑わしい (sandigdha)」「ためにならない (ahita)」「限度のない (amita)」「称賛されていない (aprasāsta)」「不適切な話に基づく (vikathāsrita)」「聖語に反する (pravacanaviruddha)」「罪を伴う (sāvadya)」といった語が含意されるという。

3. おわりに — Siddhasena の『俱舍論』批判 —

真実語の誓戒が事実レベルでの真・偽を問うものではなく、ティールタンカラが禁じ非難するという、ジャイナ教的倫理観に照らした「正しさ」を問うものとして DasCJ や DasH、また TASS をはじめとする諸註釈が理解してきた点を確認した。「会話の用

39 ここで言われる sadbhāva- における sat について、TASS (p.73) は「そして sat とは、『生起・消散・固定である』と言われているもの (sac ca utpādavyayadhrauvyam uktam)」と、TAS 5.29 による sat の定義を引いて理解している。

40 asad iti sadbhāvapratiśedho 'rthāntaram garhā ca. tatra sadbhāvapratiśedho nāma bhūtanihnavaḥ abhūtodbhāvanam ca.

41 (1-1) (1-2) について TASU が引く事例は全てアートマン論に関わることであり、TASS は他学派の提示するアートマン論について詳しく議論する。この内容の分析については別稿を期す。

42 hiṃsāpāruṣyapaisūnyādiyuktaṃ vacaḥ satyam api garhitam eva bhavati.

43 śāstrapratiśiddhavāganuṣṭhānam garhitam kutsitam iti yāvat.

44 satyam apy āgame kutsitatvād anṛtam eva bhavati.

45 hiṃsānivṛttiparirakṣaṇāntham eva hi mṛṣāvādādinivṛttaya upadiṣṭāḥ.

心」の如き実践法が別にある以上、真実語の誓戒に全てを落とし込む必然性はなく、あるいは別の規定を作成しそこにこの種の発言を盛り込むこともできた筈である。にも関わらずかかる解釈が生まれた背景を推察することは難しいが、ジャイナ教がアヒンサー至上主義に傾斜し、あらゆる誓戒はアヒンサーと紐づけられねばならない、あるいは逆に、あらゆる誓戒の違反はヒンサーと関係せねばならない、という観念が強まった所産であるという可能性は考えてよいかもしれない。このような考え方がいつから出て来たかは定かではないが、例えば既に白衣派聖典のPVは、真実語の誓戒を守らない者について説く第2章の11節で「実在しない美德について述べる者たちと、実在する美德を消す者たちは、傷害によって生物をぶち殺す〔言葉〕を〔話し〕、虚偽に結びついた者たちは、罪を伴い、不善で、正しい人によって非難されるべき、非法を生み出す言葉を、善悪を理解していない者たちとして話す」⁴⁶と述べ、虚言を述べる者は同時にヒンサーによって他者を害する者でもあり得るという観念を明示している。また、このように倫理的に不正な言動を虚言の下に包摂する以上、そのような理解を採らない体系にジャイナ教は与し得ない。最後にその点を一瞥して、擱筆することにした。

かつて述べた通り⁴⁷、TASUやTASSが「非難」の下に収める「荒さ」や「中傷」は、非ジャイナ教文献群でも望ましくない言語的行為として取り上げられてきた。就中、仏教が十不善業道における口の四業として、虚誑語 (musāvāda)・雑穢語 (samphappalāpā)・麁惡語 (pisuṇā vācā)・離間語 (pharusā vācā) を列挙することはよく知られていよう。但し、仏教においてこれら四つは並列的存在であり、虚誑語の下に他を包摂することはない。TASSが批判するのはそのように雑穢語などを虚誑語と究極的には同一であると見ない点であり、具体的には『俱舍論』の所説への批判⁴⁸として現れる。

TASS (p.75) は、「冗談と結びついた言葉は罪がない。王よ、女たちに対する〔嘘も〕そうではない。結婚の時と、命の危険の時と、一切の財が奪われる時の〔嘘も〕そうではない。〔これら〕五つの虚偽は罪でないと〔人々は〕言う⁴⁹」という説—これ

46 asaṃtaguṇudīrakā ya saṃtaguṇanāsakā ya hiṃsābhūtovaghātitaṃ aliyasaṃpauttā vayaṇaṃ sāvajjaṃ akusalaṃ sāhugaraṇijjaṃ adhammajaṇaṇaṃ bhaṇaṃti aṇabhiḡatapunnāpāvā.

47 河崎、前掲論文 (←註1)、p.34を見よ。

48 TASSが『俱舍論』業品における世親の不殺生理解を名指しで批判することについては、Marek Mejor, "Vasubandhu's *Abhidharmakośa* in non-Buddhist Philosophical Treatises," *Panels of the 12th World Sanskrit Conference Vol.8: Buddhist Studies*, Delhi, 2008, pp.119–150, esp., pp.142–143を見よ。この論文でMejorはそのような事実関係を指摘したのみで、本格的な研究は将来に行なう予定とする。しかし、その後Mejorがそのような研究を公表したか否か筆者には不明である。

49 na narmayuktaṃ vacanaṃ hinasti, na strīṣu rājan na vivāhakāle / prāṇātyaye sarvadhanāpāhare pañcāṅrāṇy āhur apātakāni //

は *Mahābhārata* 1.77.16 (プーナ批判版) に完全に一致する⁵⁰ — を否定した後、「一方、他の者たちは迷妄ゆえに、不合理な虚言の特質を述べる⁵¹」として、

別様に想う者〔が発する〕言葉は、〔聞く主体がその〕意味を理解する場合、虚誑語である⁵²。

という AK 第四章 (業品) 74偈後半と完全に一致する詩節を引用し、更に TASS は AKBh に類似する文章⁵³を提示する。AK 及び AKBh の文脈は、十不善業道において虚誑語という業道が成立する条件を述べたものである。即ち、心で想っていることとは別のことを話す主体が語り、かつその話された内容を聞く主体が理解する時に虚誑語という業道が成立し、聞く主体がそれを理解しなければ虚誑語ではなく雑穢語という業道が成立する、と世親は主張する。つまり話者の意図ではなく、聞き手の理解如何によって、業道が変化するという主張である。

これに対し TASS (p.76) は、聞く主体が理解しようとしまいと、話す主体が不注意な状態にあるという、話す主体の精神状態こそが問題だ⁵⁴として、以下のように反論する：

あらゆる点で不注意な者が、身口意の活動を通じて sat ではない (= 称賛されていない) ことを表明すれば、それが虚偽である。意図が浄化されていないから。そして雑穢語は、自分自身の好みに基づいた別種の話法として確定せしめられているものであって、勝義の点では虚言と決して異なる。筆頭論師 (= Umāsvāti) によって導出された虚言の特徴であるから⁵⁵。

50 世親も AKBh p.241 で「迷妄から生じる虚誑語 (mohaja mṛṣāvāda)」の例としてこの詩節を引用する。

51 apare tu mohād ayuktaṃ mṛṣāvādalaḥṣaṇaṃ bruvate.

52 anyathāsaṃjñīno vākyam arthābhijñe mṛṣāvacaḥ.

53 TASS (p.75, ll.15ff.) が提示する文章は AKBh p.244, ll.33ff. と類似する。一見、AKBh の該当部分を適宜抜き書きし、かつ Siddhasena が説明を加えたようにも見えるし、別の俱舍論の註釈 (しかし AKBh にかかなり近い) を見た可能性もある。あるいは、ただ TASS の伝承が劣悪なだけかもしれない。今は原文を提示するのみとする：yad vacanaṃ yam arthaṃ bravīti tasminn anyathāsaṃjñī bhavati cauram acauram iti, yaṃ vādhikṛtya bravīti sa tasya vākyasyārthābhijñō yadi bhavati tatas tadvākyam mṛṣāvākyam mṛṣāvādaḥ, arthābhijñāsa cābhijñātum samartho yaś ca utpannabhāvaḥ utpanne śrotavijñāne, vākyārthaś ca manovijñānaviśayo na śrotaviśayaś ca, abhijñātum samarthe śrotarīty etad abhyupetaṃ bhavati / vākyārthābhijñe tu saṃbhinnāḥ pralāpaḥ syān na mṛṣāvāda iti.

54 tad etad ayuktaṃ, pramattabhāṣitatvāt. arthābhijñō 'nabhijñō vā bhavatu śrotā, kiṃ tena bāhyena vastuto [so ed., read vastunā?] nimittamātratayopayujyamānena? svāśrayo 'trāparādhyati...

55 sarvathāpi pramatto yaḥ kāyavānmanoyogair asad abhidhatte tad anṛtaṃ, āśayasyāvīsuddhatvāt. saṃbhinnapralāpāś ca paribhāṣāntaram ātmarucyā vyavasthāpitam anṛtavacanāt paramārthato na bhidyata eva vācakamukhyapranītānṛtalakṣaṇāt iti.

精神的に不注意な者が、身・口・意の三業のうちのいずれかを用いて sat ではないことを表明すること、つまり不注意たる話す主体こそが重要であって、聞く主体の理解度によって虚言かそうでないかが変化することなど、Siddhasena にしてみれば有り得ないことである。そもそも、sat を「称賛」の意味と定義する立場からすれば、雑穢語は究極的に言えば虚誑語と同一であり、世親の如く虚誑語か雑穢語かを分類すること自体がまったくの不合理である、ということになる。

【一次文献一覧】

- AK *Abhidharmakośa*
P. Pradhan (ed.), *Abhidharm-Kośabhāṣya of Vasubandhu*, Patna, 1967.
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya*. → See AK.
- AmK *Amarakośa*
Chintamani Shastri Thatte (ed.), *Amarakośa with the Commentary of Maheśvara*, Bombay, 1877.
- Āy *Āyāraṅga*
Jambuvijaya (ed.), *Āyāraṅga-suttam*, Jaina-Āgama-Series No.2 (I), Bombay, 1976.
- ĀyC *Āyāraṅgacūrṇi*
Ānandasāgara (ed.), *Śrīācārāṅgacūrṇiḥ*, Ratnapura, 1941.
- ĀyŚ Śīlānka's Commentary on Āy
Sāgarānanda (ed.), *Ācārāṅgasūtram and Sūtrakṛtāṅgasūtram with the Nirukti of Ācārya Bhadrabāhu Svāmī and the Commentary of Śīlānkācārya*, re-edited with appendices etc. by Jambūvijaya, Lālā Sundarlāl Jain Āgamagranthamālā Vol.I, Delhi, 1978.
- TAS *Tattvārthādhigamasūtra*
Hīrālāl Rasikdās Kāpadīā (ed.), *Tattvārthādhigamasūtra (A Treatise on the Fundamental Principles of Jainism)* Part II, Sheth Devchand Lalbhai Jain Pustakodhar Fund Series No76, Surat, 1930.
- TASS Siddhasena's Commentary on TAS. → See TAS.
- TASU Autocommentary on TAS. → See TAS.
- Das *Dasaveyāliya*
Walther Schubring, *The Dasaveyāliya Sutta*, Ahmedabad, 1932. = *Kleine Schriften* pp.109–248.
- DasCA Agastyaśiṃha's Cūrṇi on Das
Puṇyavijaya (ed.), *Sayyambhavas Dasakāliyasuttam with Bhadrabāhus*

- Niryukti and Agastyasimhas Cūrṇi*, Prakrit Text Society Series No.17, Ahmedabad, 2003 (rep.).
- DasCJ Jinadāsa's Cūrṇi on Das
Ānandasāgara (ed.), *Prasiddhyā Śrī Jinadāsagaṇimahattararacitā Śrīdaśavaikālikacūrṇiḥ*, Ratlam, 1933.
- DasH Haribhadra Yākinīputra's Commentary on Das
Śrī *Daśavaikālikasūtram : tarkasamrāt Śrīharibhadrasūrikr̥taṭīkopetaṃ*, Piṇḍavāḍā, Vi. sam. 2037 (= 1980 or 1981 A.D.).
- PV *Panḥāvāgaranāṃ*
Mahāprajñā (ed.), *Aṃgasuttāni* Vol.3, Lāḍnūm, 1992.
- YŚSV Svopajñāvṛtti on the *Yogaśāstra* by Hemacandra
Jambuvijaya (ed.), *Yogaśāstram First Part (Pratham and Dvitiya Prakāśa)*, Delhi, 2009.
- RV *Rājavārtika* by Akalaṅka
Mahendra Kumar Jain (ed.), *Tattvārtha-vārtika [Rājavārtika] of Śrī Akalaṅkadeva Part 2*, Jñānapīṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā Sanskrit Granthāṅka 20, New Delhi, 1999.
- VBhM Malayagiri's Commentary on the *Vyavahārabhāṣya*
Municandra (ed.), *Śrī Vyavahārasūtram pīṭhikā bhāg 1*, Sūrat, 2010.
- SAS *Sarvārthasiddhi* by Pūjyapāda
Phoolchandra Shastri (ed.), *Āchārya Pūjyapāda's Sarvārthasiddhi*, New Delhi, 1997 (7th ed.).

* 本稿は科学研究費補助金（若手 B：15K16620）による研究成果の一部である。